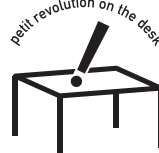


Vol.54

## 机の上の小さな変革



## 具体性の想起

こんにちは、菅俊一です。今回は、イメージと現実のズレについて考えていきたいと思います。早速ですが紙とペンを用意して、何も見ずに「500円硬貨」「100円硬貨」「50円硬貨」「10円硬貨」「5円硬貨」「1円硬貨」の順に、実際の大きさを思い出しながら丸を描いてみてください。

・ ・ ・

いかがですか？ 書けたら本物の硬貨を持ってきて、その丸の上に重ねて置いてみましょう。丸が隠れてしまえば想像のほう小さかったということですし、丸が硬貨からはみ出した場合は想像のほうが大きかったということになります。ピッタリ合ったものはありましたか？ ちなみに私は、何1つピッタリ合うものはなく、すべて想像のほうかなり小さかったです。特に一番大きく描いた500円硬貨は、100円硬貨とほぼピッタリのサイズでした。

・ ・ ・

では次は、クレジットカードの大きさの四角形を同じように描いてみて、書けたら先ほどと同様に実物を重ねてみてください。こちらはどうでしたか？ 私は、やはり一回り以上小さいサイズの四角形を描いてしまいました。硬貨もカードも、多くの方は私と同じように、どちらもほぼ毎日のように触っているにもかかわらず、正確なサイズを書くのはかなり難しかったのではないのでしょうか。

## 頭の中で削ぎ落とされる具体性

それでは最後に、一番大きさがズレていた硬貨を目の前に置いて、それをよく見ながら、同じサイズの丸を描いてみてください。おそらくかなり精度高く再現できたのではないのでしょうか。「見たら同じ大きさに描けるのは当たり前だろう」と思うかもしれませんが、よくよく考えてみると、はじめにやっていただいた「頭の中で何らかのイメージを思い起こしながら、それに合わせるように手を動かす」ことも、視覚的イメージを参照しながら手を動かすという意味では同じです。日常的に触れてよく知っていると思っている事物に対しても、比較的抽象度の高い性質である形状のような情報は、ある程度の精度を持って想起することができても、大きさや重さのような具体性の高い情報については、かなり大きく削ぎ落とされていることになります。

今回やっていただいたことから考えると、私たちの記憶の仕方には精度にバラつきがあるため、何か具体的な判断が必要なときに、頭の中の要素だけで判断しても問題がない場合と、実際に確認しないとズレが生じてしまう場合があるようです。現在の社会は比較的簡単に様々な情報を取得できますが、それらをもとに判断を行なう際には、具体性の高い情報を手に入れることが重要なかもしれません。



## PROFILE 菅 俊一 〈SYUNICHI SUGE〉

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンテコノミクス』など。